

ベ ス ト ピ ア
Bestopia

「パリ通信 18号」

ベストピアは小原靖夫の
個人誌です。

平成
二十五年六月
第十八号

< 2013年 6月 >

古賀 順子

アルベール・カーンの日本庭園

6月に入り、パリもようやく夏らしい日差しに恵まれるようになりました。青空に誘われ、緑の庭園を訪れるには最適な季節です。メトロ10号線西の終点「ブローニュ・ボン・ド・サン＝クルー」から徒歩3分、アルベール・カーン庭園があります。

アルベール・カーン(1860-1940)は、アルザス地方マルムーチエのユダヤ商人の息子として生まれます。1870年晋仏戦争の和平条約で生地はドイツ領となり、フランス領へ引越し、ユダヤ名アブラハムをフランス名アルベールに改めます。10歳のときに母を亡くし、16歳でパリに上京。銀行で働きながら学業を続け、文学と科学のバカロレア、法学学位を取得。商才があり、1898年カーン自身の銀行を創立します。資金貸付け、アフリカの金山やダイヤモンド山への投資などにより、巨額の資産を築きます。

銀行家として成功したアルベール・カーンは、その富を博愛と平和に注ぎます。世界一周し、50ヶ国以上を訪れ、民族理解と国際協力の必要性を感じ、いくつもの文化財団を設立します。当時出来たばかりの映画技術、リュミエール兄弟が1907年特許を取得した「オートクロム写真」(最初のカラー写真技術)に着目し、諸民族の風俗生活を撮影した「地球アーカイブ」と称する7万2千点の貴重なオートクロム写真コレクションを残しています。日本は二回訪問しており、即位前の昭和天皇、当時の内閣総理大臣大隈重信と会見しています。

最新技術に興味を持ち、時代を先駆けて生きたアルベール・カーンが特別の思いで愛したのが、日本文化です。銀行家として世界中を駆けるダイナミックな社会生活を支えていたのが、日本人の精神性でした。セヌ河に面したブローニュ・ビヤンクールに土地を購入し、庭園を造り続けます。日本庭園、フランス庭園、イギリス庭園、ボージュ地方の森、湿地、白樺を植えた「金の森」、杉や松の「青い森」など、庭園はカーンの人類愛を具現化する場所になります。日本から運ばせた木造家屋を配した日本庭園には、睡蓮を浮かべた池に錦鯉が泳ぎ、高低差のある塚、石の灯籠、赤い日本橋も架かっています。自然を人工的に再現することにおいては、日本庭園もフランス庭園も同じです。幾何学模様で設計され、自然をも統御するかのような自然観がフランス庭園だとすれば、日本庭園はその対極です。苔の庭は、静かに流れる水の音だけを残して、ひっそりと内省的な自然観を反映しています。争いを求めず、平和を尊ぶ日本人の精神を形式化したのが日本庭園であり、アルベール・カーンはそこに深い親近感を抱いたのではないかと思います。晋仏戦争や第一次世界大戦を生き、人類平和への願いを日本庭園に込めたのです。

1929年ニューヨークの株の大暴落とそれに続く世界大恐慌によって、カーンは倒産し、全財産を失います。民族理解と国際協力のために設立した財団も運営できなくなります。70歳のときでした。他界までの10年間は、用益権を認められ、庭園に囲まれたブローニュ・ビヤンクールの地で過ごします。

パリ・ユネスコ本部の日本庭園との出会いもそうでしたが、日本の精神性をパリで教えられる思いがしました。

アルベール・カーンの日本庭園



(撮影：古賀 順子)